

七会村埋蔵文化財発掘調査報告書第4集

岡台遺跡

平成11年12月

茨城県西茨城郡七会村教育委員会

七会村埋蔵文化財発掘調査報告書第4集

岡台遺跡



平成11年12月

茨城県西茨城郡七会村教育委員会

序

近年、高齢化社会を目前にして、福祉の充実が叫ばれております。

本村でも、その気運を受けてお年寄が家族とともに快適に暮らせる地域社会の構築を目指して種々の施策をすすめております。その施策の一環として、平成11年度と12年度の2ヶ年にわたり、長年の懸案でありました「七会村保健福祉センター」の建設を小勝岡台地区に計画いたしました。この保健福祉センターは、村民の健康増進及び在宅病弱老人の健康回復等を図ることを目的としており、村民の福祉向上に資するものであります。

造成に先行して、埋蔵文化財所在の有無確認調査を実施しました。調査の結果、平安時代頃と推定される遺構・遺物が発見され、文化庁に遺跡発見の届けをして、遺跡台帳に「岡台遺跡」として登載いたしました。

その後、文化財保護の立場と保健福祉センター建設推進との関係において苦慮いたしましたが、県当局とも折衝を図り、慎重に協議した結果、記録保存の措置を講ずることとなり、緊急発掘調査を実施いたしました。その結果、本書に集約したとおり、先人の残した貴重な遺構・遺物が検出され、歴史を解明する上での多大な資料を得ることができました。

文化財はいうまでもなく、歴史・文化の正しい理解のために欠くことの出来ないものであり、特に埋蔵文化財は古代住民の生活様式を解く鍵として貴重なもので、将来の文化向上の基礎を為すものであります。本書がその研究の資料としてはもとより、我が郷土七会村の歴史の理解を深め、教育文化向上に広く活用されることを期待して止みません。

最後になりましたが、発掘調査にあたってご指導・ご協力をいただきました、県教育庁文化課並びに主任調査員の萩原義照先生、七会村文化財保護審議会委員の皆様、関係機関・関係者の皆様に対し、衷心より、感謝の意を表します。

平成11年12月

七会村長 阿久津 藤 男

例　　言

1. 本書は、西茨城郡七会村大字小勝1,380-2番地に所在する、岡台遺跡の調査報告書である。
2. 発掘調査は、「七会村保健福祉センター」建設工事に伴うものである。
3. 発掘調査は、七会村教育委員会が主体となり、同村役場保険福祉課の協力を得て実施した。
4. 発掘調査は、県文化課、七会村教育委員会の指導の下に、萩原義照が担当した。
5. 発掘調査は、平成11年7月30日から始めて9月2日に終了した。
6. 本遺跡の出土遺物、関係資料は、七会村山村文化資源保存伝習館に保管する。
7. 発掘調査及び整理に当たっては、次の方々にご協力を頂いたので、記して感謝したい。

・七会村文化財保護審議会委員

・阿久津　忠一　・仲田　嘉吉　・片岡　大膳

・森　茂春　・小林　健二

・主任調査員　・萩原　義照

・協力員　・羽石　栄洋

・三村　進（県文化財保護指導員）

・補助員

須田　進　高橋　きみ江　大越　慶子

田辺　信子　広瀬　文子　大越　史子

・事務局

教育委員会事務局長　鈴木　義忠　同主幹　小林　克成

同　派遣社会教育主事　大木　　公

目 次

序

例言

I. 調査経緯	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査方法	1
3. 調査経過	2
II. 遺跡の位置と環境	5
III. 遺構と遺物	6
1. 遺跡の概要	6
2. 坪穴住居と出土遺物	6
・第1号住居跡	
・第2号住居跡	
・出土遺物	
まとめ	16

挿 図 目 次

第1図 七会村全図	3	第2図 遺跡位置図	4
第3図 遺跡周辺地形図	4	第4図 第1号住居跡実測図	7
第5図 カマド実測図	8	第6図 第2号住居跡実測図	9
第7図 出土遺物実測図	13		

写 真 図 版

- ・調査前遺跡全景
- ・調査風景
- ・住居跡
- ・カマド
- ・出土遺物

I. 調査経緯

1. 調査に至る経過

七会村は、同村小勝字岡台地内に「七会村保健福祉センター及び周辺整備事業」を計画したので、開発に先立って平成10年12月22日付で、七会村教育委員会に整備事業計画地である岡台地区の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱い」について照会した。

村教育委員会は、岡台地区の遺跡の分布状況等については把握していなかったため、平成11年2月28日、埋蔵文化財の所在の有無を確認するため、表面調査を実施した。その結果、事業計画地の一部に土師器、須恵器の破片が採集されたため、同年3月1日付けで村当局に遺跡の所在することを回答した。ついで教育委員会はさらに岡台遺跡の性格や範囲を把握するために、7月3日試掘調査（調査担当：根本康弘氏）を実施し、表土下のローム面に黒色の落ち込みや焼上塊が確認されたため、法第57条の6の規定により、文化庁長官に遺跡を発見したこと通知し、七会村遺跡台帳に「岡台遺跡」として登載した。

岡台遺跡を含む岡台地区内は「七会村保健福祉センター及び周辺整備事業」の計画予定地に入っているため、遺跡の取り扱いについて、埋蔵文化財保護の立場から、教育委員会は村当局（開発担当課）と慎重に協議をした。その結果、遺跡の所在する地点は、保健福祉センターへの進入道路としての土木工事が計画設計されている状況で、また福祉施策の重要性も考え、村の周辺整備事業の変更は不可能であるとの結論に至った。ここにおいて遺跡の現状保存は困難であるとし、記録保存の措置を講ずることになり、県教育庁文化課の指導助言を得て、平成11年7月30日から岡台遺跡の発掘調査を実施することになった。

2. 調査方法

1. 調査区における地形図及び方位（座標）は、「県営中山間地域総合整備事業」による方眼平面図を基準にした。
2. 表土の除去は、重機によって行われた試掘調査の成果を踏まえて、これによって確認された遺跡を1号住居跡とした。
3. 遺構確認のため、トレーナーを設定し調査区を拡張し、表土除去作業終了後遺構の平面を確認し、発見順に遺跡番号を付した。
4. 住居跡の調査は、土層観察用ベルトを設定し、4区に分けて掘り込み、遺物は原位置を知るために柱状に残した。
5. 土層は色相・混在物・強度等を観察し、色相は『新版標準土色帳』によった。

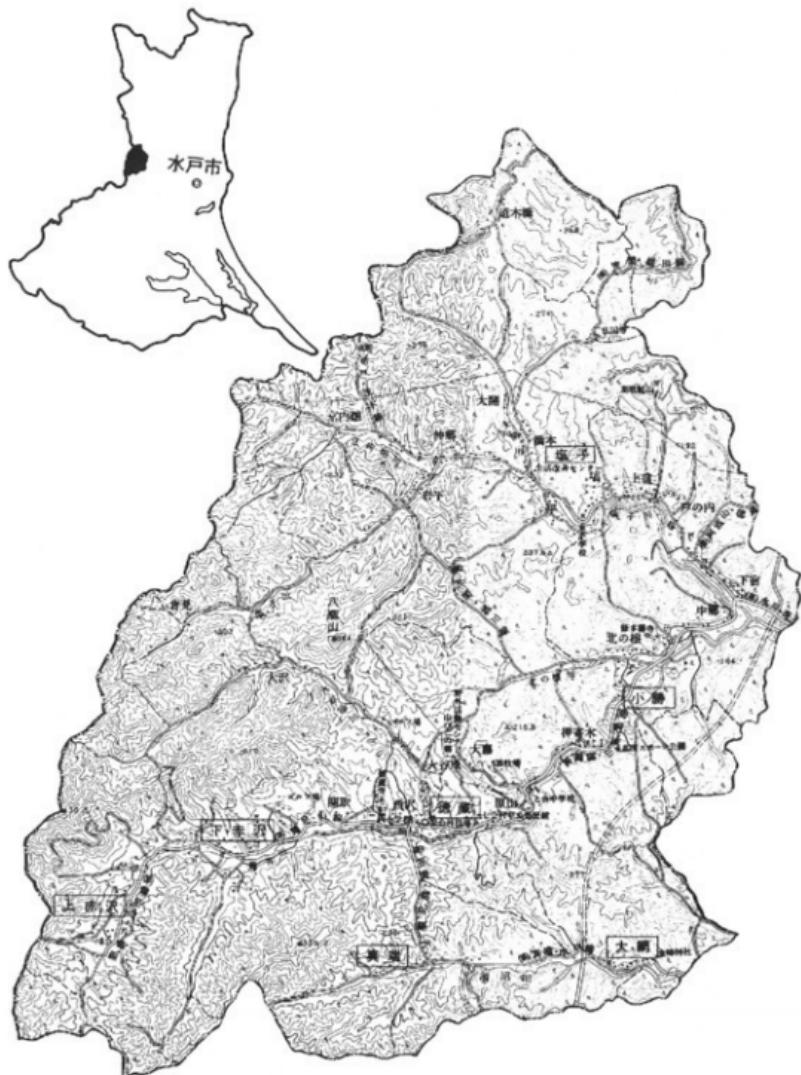
6. 調査区内の遺構の実測は、水糸方眼地張りと平板測量を用いた。縮尺は住居跡は20分の1、カマドは10分の1として行った。
7. 調査区内の発掘の経過、調査風景の記録は写真撮影によった。
8. 調査区内の遺構配置図（平面図）は、調査終了後平板測量及び写真撮影によった。
9. 調査（特に作業）は、安全を第一に相互協力の態度で成果を得るよう心掛けた。

3. 調査経過

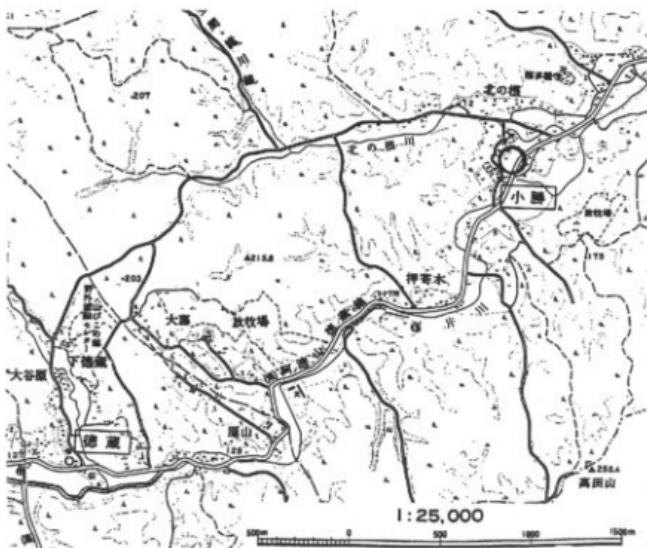
調査から報告書刊行までの経過の概要は次のとおりである。

平成11年

- | | |
|---------|---|
| 7月3日（土） | 七会村教育委員会によって試掘調査実施、遺構確認。 |
| 30日（金） | 発掘調査開始、発掘用器具、調査区設定
阿久津村長、阿久津教育長出席挨拶、調査員村文化財保護審議委員
協力 三村指導員、役場保険福祉課、教育委員会、事務局
・ 1号住の遺構確認、セクションベルト設定、4区に分け堀込み。
・ 調査区拡張、トレチ設定、2号住確認、堀込み。 |
| 31日（土） | ・ 1号住、2号住の堀込み続行、カマド跡確認、住居跡周辺から柱穴。2号
住内に土坑状遺構確認。
七会西小：久野校長、羽黒小：根本教諭、北茨城市教委：市毛主正來訪 |
| 6日（金） | ・ 遺構実測、土層実測、遺構断面実測 |
| 7日（土） | ・ 調査区清掃、遺構配置図、写真撮影、調査用具の収納
・ 現場終了 |
| 28日（土） | ・ 整理調査、遺物洗浄 ・ 分類、接合
・ 遺構トレース作業 |
| 9月2日（木） | ・ 整理調査、遺物実測 ・ 拓本、遺物トレース作業
・ 遺物写真撮影 |
| 9月～10月 | ・ 報告書作成、図版作成、原稿執筆、編集、印刷 |



第1図 七会村全図



第2図 遺跡位置図



第3図 遺跡周辺地形

Ⅱ. 遺跡の位置と環境

七会村は県の北西部に位置し、東は常北町、桂村、北に御前山村、西は栃木県茂木町に接し、南は近年開通した「さくらトンネル」によって、笠間市との結び付きは近距離になっている。総面積は63.04km²を有し、その地形は不整形の四角形を呈す。また鶏足山（430.5m）、高田山（255.4m）等の縁豊かな山地に囲まれた農（山）村で、耕地と集落は山間の低地を流れる藤井川、塩子川、潤沼川流域の微高地に開けている。村の中央を東西に貫通する県道阿波山・徳蔵線や、笠間・緒川線が隣接市町村との結びつきを深め、地域発展に果たす主要幹線となっている。

当村は、旧徳蔵村、旧上赤沢村、旧下赤沢村、旧大綱村、旧真鑓村（笠間藩領）と、旧小勝村、旧塩子村（水戸藩領）の7か村を併せ、村名を七会村とし現在に至っている。

遺跡は、村役場のある徳蔵中央から東へ約1km、県道阿波山・徳蔵線が通る大字小勝の岡台に所在する。台地斜面西北の低地は小勝小学校の跡地で、ここを含む一帯が「七会村保健福祉センター及び周辺整備事業」の計画区域に入っている。県道は遺跡の所在する岡台の中央を切り通して建設されている。

七会村の遺跡を概観すると、現在遺跡台帳に登載されている遺跡は、塙遺跡（塩子）、中郷遺跡（小勝）、北の根遺跡（小勝）、山の田遺跡（徳蔵）、岡台遺跡（小勝）等で、その他中世の城館跡としては戸倉館跡（徳蔵）、長者屋敷跡（徳蔵）、四方とや城跡（小勝）、二反田城跡（小勝）等の遺跡が確認されている。

七会村は山地が多い地形のため、遺跡特に埋蔵文化財の分布調査のための踏査は困難である。現在、村教育委員会は「茨城県遺跡地図」改訂版作成のための遺跡の分布調査に熱心に取り組んでいるので、今後遺跡数の増加が期待されると思われる。

III. 遺構と遺物

1. 遺跡の概要

当遺跡は、七会村大字小勝字岡台1,380-2に所在し、県道徳蔵・阿波山線の岡台の切り通し両側台地の中央に位置している。調査面積は、保健福祉センターへの進入道路敷き、及びその周辺約330m²の小面積に限られる。調査区台地の東南麓は藤井川が流れている。北西の低地は、旧小勝小学校跡地と鎮守鹿島神社が眼下にみられ、標高約100mの台地である。

遺跡は、平安時代に位置付けられる竪穴住居跡2軒でどちらもカマドを付設する。うち1軒は、後で掘り込まれた土坑3基が床面にある。

竪穴住居跡から出土した遺物は土師器が主で、瓶、壺等の破片が出土している。須恵器片の出土は少ないが、黒色処理と墨書き土器の出土は、本遺跡の性格を知る上で貴重である。その他、住居跡から砥石が出土している。

2. 竪穴住居と出土遺物

第1号住居跡

本跡は調査区の東側に位置し、平面形は方形を呈する。規模は長軸3.8m、短軸3.6mを測る。主軸方向はN-20°-Wを指し、壁は外傾して立ち上がる。壁高は40~50cmを測る。床面はロームそのもので、堅く平らである。壁溝は確認されなかった。柱穴らしき穴は確認されなかったが、住居跡外周には柱穴らしき穴が多く検出されたが、その性格は明らかにしがたい。また南壁部中央に出入口と考えられる高まりが認められたが、床面確認のための除土作業によって削平された。

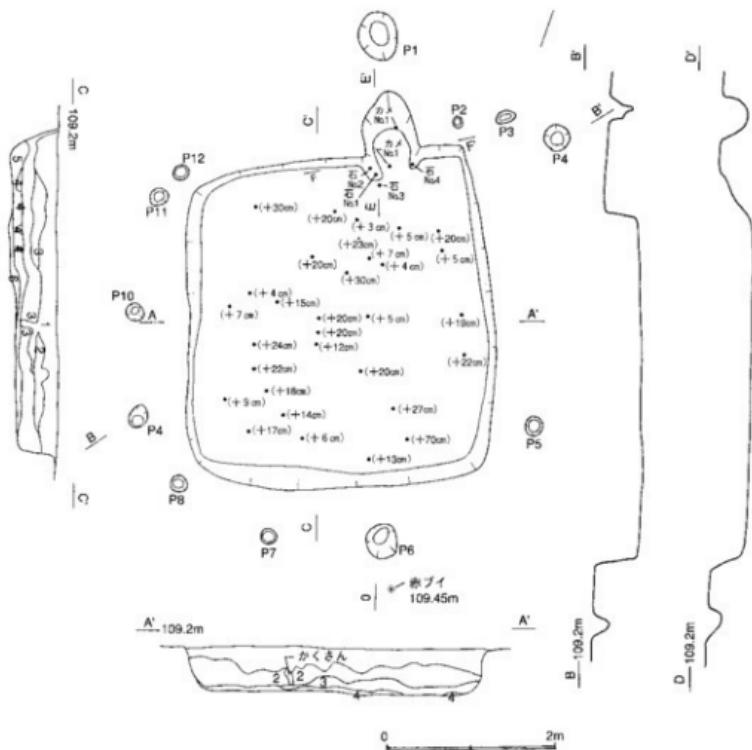
カマドは北壁東寄りに付設され、長さ100×65cmを砂質粘土で構築され、両袖部ともに砂岩で補強され、全体的に遺存状態は良好である。覆土は自然堆積である。

第2号住居跡

第1号住居跡の西側に位置し、長軸3.0m、短軸2.8mのほぼ方形平面形で、東壁中央にカマドを設けた竪穴住居である。ローム層上面まで除土したため、壁の立ち上がりが低い。床面に柱穴は認められなかった。ただし、南壁の3個は補助柱ではなかったかとも思われる。その他周辺に多く穴が検出されたが、その性格はわからない。

また、長方形土坑1基、円形土坑2基が住居跡内に掘り込まれているため、床面を観察することはできない。

カマドは砂質粘土で構築され、火床はよく焼け赤色を呈しているが、円形の土坑によって袖部、焚口部が破壊されて、その範囲等については実測できなかった。

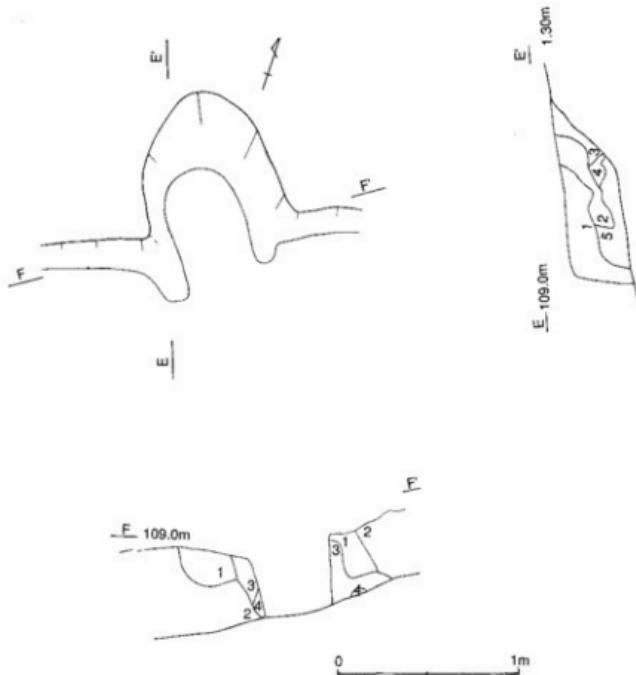


第1号住居跡土層観察表

A-A' 1. 黒褐色 7.5YR5/1 少量のローム粒含む
2. 広褐色 7.5YR5/2 少量のローム粒含む
3. 黒褐色 7.5YR3/2 多量のローム粒含む
4. 明褐色 7.5YR5/6 ロームブロック
5. 明褐色 7.5YR5/6 硬く締まる
6. 明褐色 7.5YR5/6 底面ローム、硬く締まる

C-C' 1. 黒褐色 7.5YR3/2 少量のローム粒含む
2. 黒褐色 7.5YR3/2 少量のローム粒、少量の燒土粒含む
3. 黒褐色 7.5YR3/2 多量のローム粒、ロームブロック
4. 明褐色 7.5YR5/6 ロームブロック、黒色土混

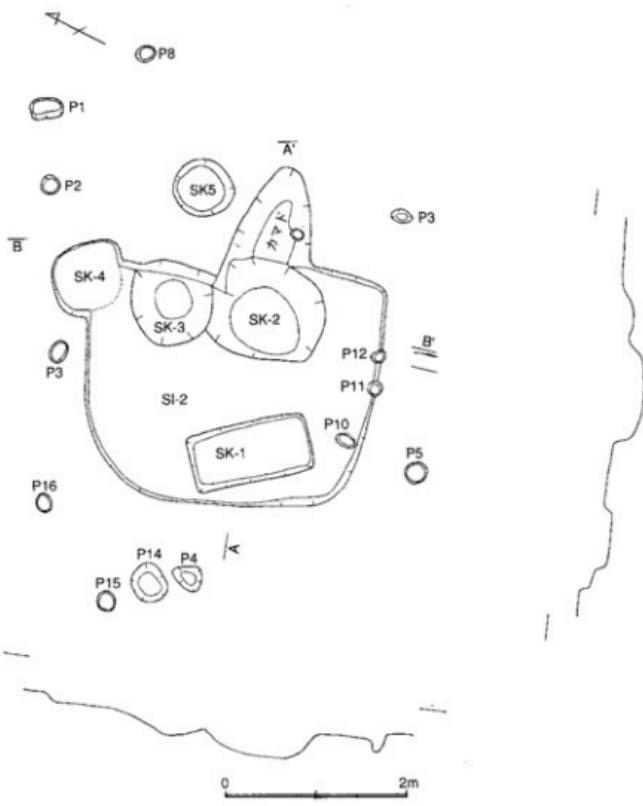
第4図 第1号住居跡実測図



第1号住居跡カマド土層観察表

- E-E'
1. 赤紫色 7.5YR5/6 ローム粒子、焼土粒子、砂少量、硬い
 2. にぶい赤褐色 2.5YR5/3 ローム粒子、焼土粒子、砂少量、硬い
 3. 棕 7.5YR7/6 ローム粒子、焼土粒子、砂少量、硬い
 4. 赤褐色 7.6YR4/6 ローム粒子、焼土粒子、炭化粒子、硬い
 5. にぶい赤褐色 7.5YR5/4 ローム粒子、焼土粒子、炭化粒子、硬い
- F-F'
1. 明赤褐色 7.5YR5/6
 2. にぶい赤褐色 7.5YR4/4
 3. 明赤褐色 7.5YR5/8
 4. 暗赤灰色 7.5YR3/1

第5図 カマド実測図



第6図 第2号住居跡実測図

出土遺物

本調査区から出土した遺物は第1号住居跡が大半で、その大部分が壺型の口縁部破片で、完形土器の出土はなかった。出土総数253点、うち土師器244点、須恵器9点、砥石2点で、うち黒色処理されたもの8点、墨書き土器3点である。出土遺物中、主に図示できるものについて実測と観察、および図版にて収録した。

第1号住居跡出土遺物

- ・1は、土師器壺型の口縁部破片、推定口径13.0cm、残存器高4.2cm、口縁部はゆるやかに「く」の字に外反し立ち上がる。口縁部内外面横ナデが行われている。胎土には砂粒、雲母等を含み、色調はにぶい橙色を呈する。焼成普通。
- ・2は、土師器壺型の口縁部破片、推定口径13.5cm、残存器高3.3cm。ロクロ整形、内面ヘラミガキ、外面ロクロナデ。判読不明の墨書きしきものあり。色調は浅黄、胎土は砂粒、長石等含む。焼成普通。
- ・3は、須恵器の底部、残存器高、推定底径6.2cm。ロクロ整形、底部ヘラケズリ、色調は灰黄色、胎土は砂粒、長石、雲母を含む。焼成普通。
- ・4は、土師器壺の口縁部破片、推定口径19.2cm、残存器高8.8cm。頸部は「く」の字状に曲がって立ち上がり、口縁部端が外上方につまみ上げられる。口縁部内外面横ナデ、胴部内外面ヘラケズリ。色調は橙色を呈し、胎土に砂粒、長石、雲母等を含む。焼成普通。
- ・5は、土師器壺型の口縁部破片、推定口径19.0cm、残存器高8.2cm。口縁部は「く」の字状にゆるやかに外反している。口縁部内外面ともにナデ整形され、胴部内面は継位の刷毛目が、外面はヘラケズリの整形痕がよく残っている。また、口縁部外面に煤の付着が見られる。色調はにぶい橙色を呈し、胎土に砂粒、長石、石英、雲母等を含む。焼成普通。
- ・6は、土師器壺の口縁部破片、推定口径19.4cm、残存器高8cm。頸部内面に輪積痕が見られ、口縁部内外面ナデ、胴部ヘラケズリ整形。色調はにぶい橙色を呈し、胎土の砂粒、石英、雲母等を含む。
- ・7は、土師器壺の口縁部破片、推定口径21.2cm、残存器高8.4cm。頸部はゆるく外反し、口縁部端がつまみあげられて内傾する。口縁、頸部ともにナデ整形された薄手の上器で、色調は橙色を呈する。胎土に砂粒、長石、石英を含む。焼成普通。
- ・8は、須恵器、壺形の底部破片、底部7.3cm、残存器高2.0cm。ロクロ整形、底部回転ヘラ起し、色調は灰褐色を呈す。胎土に砂粒、石英等を含む。焼成普通。
- ・9は、土師器、壺形の口縁部破片、推定口径13.4cm、残存器高4.8cm。ロクロ整形、色調は黄

橙色、胎土に砂粒、石英等を含む。焼成普通。

・10は、土師器、壺形の破片で、推定口径部13.2cm、器高5.4cm、推定底部径5cm。口縁部は底部から大きく外反して立ち上がり、外面ともロクロ整形。前記9と同じ器種で、その手法も同じである。底部回転ヘラ起し。色調は浅黄橙色、胎土に砂粒、石英等を含む。

・11は、土師器、壺形の破片、推定口径13.1cm、器高4.1cm、底径6.2cm、口縁部欠損が多い。ロクロ整形、底部は回転ヘラケズリ、体部は内反し大きく開いて立ち上がる。外面とも黒色処理が施され、特に内面はミガキの黒色処理、外面の黒色は摩耗して灰オリーブ色を呈する。焼成良好。

・12は、須恵器、壺形底部の小破片、ロクロ整形。底部回転ヘラ起し、内面には薄い黒色痕が残る。外面灰白色を呈す。胎土は砂粒、石英、雲母等を含む。

・13は、土師器、壺形の口縁部破片、推定口径20cm、残存器高10.2cm、口縁部は頸部から「く」の字状に外反して立ち上がり、胴部は球状に膨らみを見せている。口縁部内外とも横ナデ、胴部外面は継位のヘラケズリされている。残存外面胴部下端に、判読困難だが墨書き痕が見られる。色調は橙色を呈し、胎土中に砂粒が多く、長石、石英等も含む。

・14は、土師器、壺形の口縁部破片、推定口径19.8cm、残存器高9.8cm、口縁部内外とも横ナデ胴部外面は斜位のヘラケズリ、内面は刷毛目整形。カマド袖部から出土し、内外面ともに煤状の炭化物の付着が見られる。色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土は砂粒、長石、石英等を含む。焼成普通。

・15は、土師器、壺形の口縁部破片、推定口径21.0cm、残存器高7.2cm。口縁部は頸部から「く」の字状に外反して立ち上がり、胴部はやや膨らみを有している。口縁部内外横ナデ、胴部内面刷毛目、外面斜位のヘラケズリ整形。色調は明赤褐色を呈し、胎土は砂粒、石英、長石等を含む。焼成普通。

・16は、土師器、木葉痕のある底部破片で器種不明、底径1.2cm。

・17は、土師器、壺形の口縁部破片、推定口径13.0cm、残存器高5.4cm。

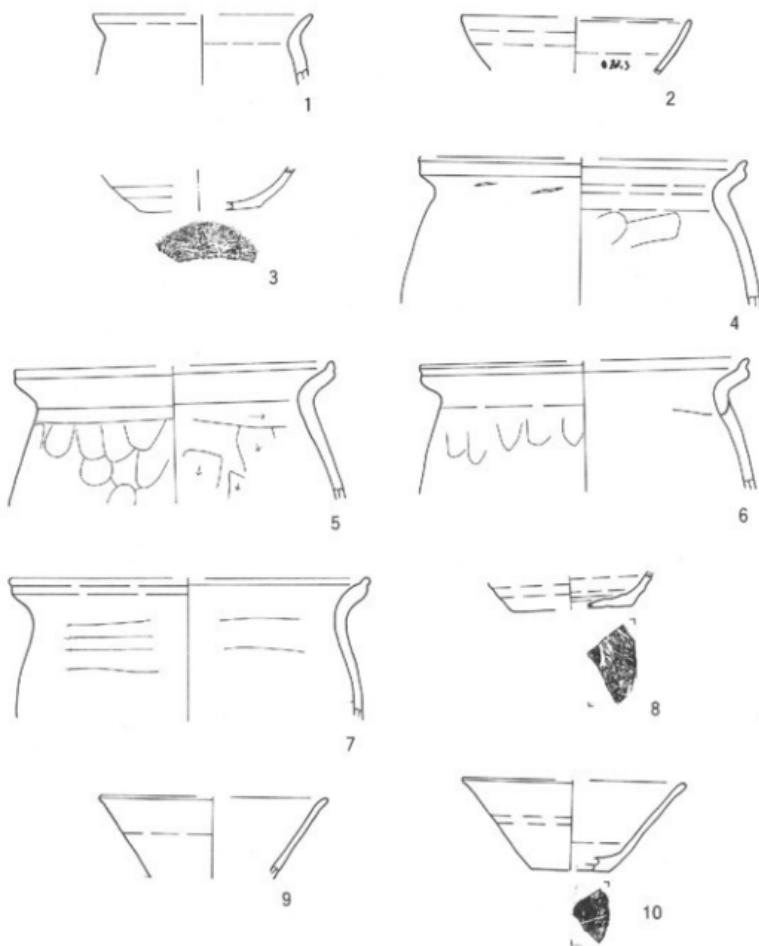
・18は、須恵器壺、口縁と胎部の一部を欠く。口縁部は底部より内反ぎみに開いて立ち上がり、ロクロでよく整形され、体部外面に「千富」の墨書きが見られる。底部は回転ヘラ起し、無調整。色調は灰白色を呈し、胎土に白色粒子少量含む。焼成良好。

・19は、土師器、壺形の口縁部破片、推定口径21.8cm、残存器高14.9cm。口縁部は頸部より大きく外反し立ち上がる。カマド内より出土し、内外面に煤の炭化物が付着する。口縁部、頸部横ナデ、胴部内外面ヘラケズリ整形。色調は煤付着によって茶褐色を呈す。胎土は砂粒、長石、石英等を含む。焼成普通。

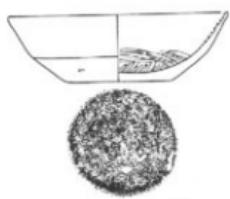
・20は、土師器、壺形の口縁部破片、推定口径18.8cm、残存器高10.8cm。口縁部は「く」の字状

に頸部よりゆるやかに外反して立ち上がる。胸部は膨らんで球状を呈する。口縁部内外面ともナデ、胸部内面ナデと刷毛目の整形が、外面は継位のヘラケズリ整形がなされている。胸部外面は摩耗して、色調も黄褐色化している。胎土に砂粒、長石、石英等を含む。

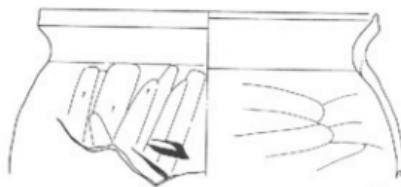
- ・石製品の出土は、砥石 2 点が第 1 号住居跡内から出土した。長さ 9.8cm、幅 6.5cm と、長さ 13.0cm、幅 8.4cm の大型の砥石で、研磨として利用された砂岩製である。
- ・第 2 号住居跡からは、土師器の破片 4 点（うち黒色処理 1）、小破片のため実測を省略した。



第7図 第2号住居跡実測図



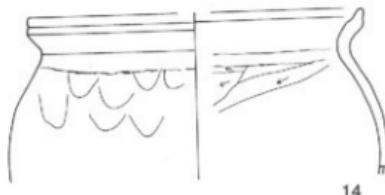
11



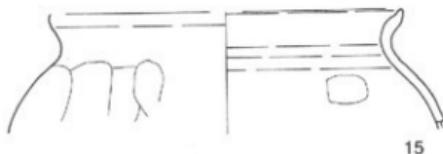
13



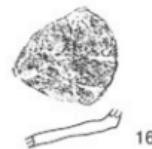
12



14



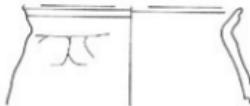
15



16

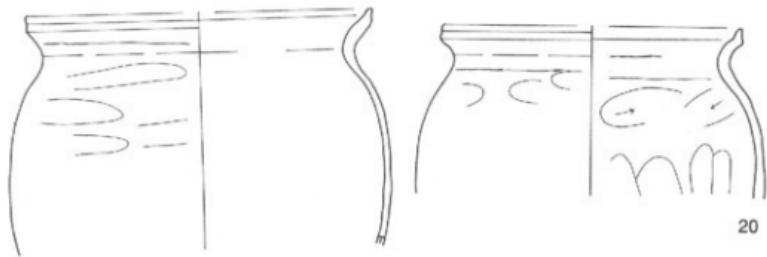


18



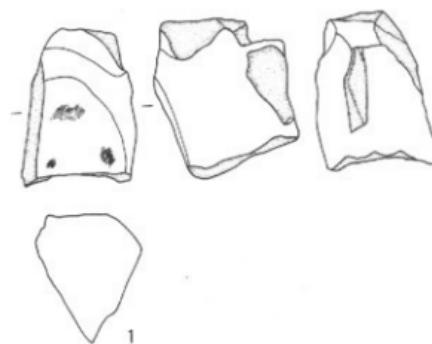
17

第8図 住居跡出土遺物実測図（2）

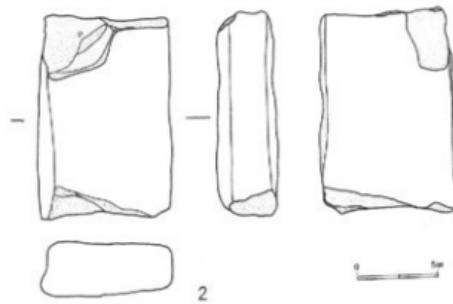


19

20



1



2

0 5cm

第9図 住居跡出土遺物実測図（3）

ま　と　め

七会村保健福祉センター建設工事に伴う、岡台遺跡の緊急調査によって平安時代の遺構、遺物が検出され、貴重な資料を得ることができた。遺構としてカマドを付設した竪穴住居跡2軒を検出したが、いずれも主柱穴を持たない小形の住居跡である。また墨書き土器、黒色処理された土器などが出土していることから、遺跡の時期については平安時代後期に比定されると考えられる。また、第2号住居跡内に墓坑とも考えられる円形と長四角形の土坑が掘り込まれていることは特異な遺構と判断される。

出土遺物についても、菱形の口縁部破片が大部分を占めていることからも、廃棄された土器破片とも思われる。ただ墨書き土器の出土は貴重な遺物である。一応墨書き文字を「千富」と読んだが、明瞭に判読したわけではない。

今回の発掘調査は、その範囲が小面積に限られ、竪穴住居跡も2軒のみの状況で、当地域の歴史性を考察することはできない。しかし、古代この地方は那珂郡鹿島郷に属し、鹿島神宮との関係が深く、古内から塩子、小勝地域には鹿島神社が多く鎮座する。このことからみても今回の調査の成果は、岡台遺跡の集落の性格を考える一つの資料でもある。

最後に、本調査に当たって埋蔵文化財に対する村当局の真面目な取り組みと終始協力的な態度に深く感謝を表す次第である。

写 真 図 版

岡 台 遺 跡



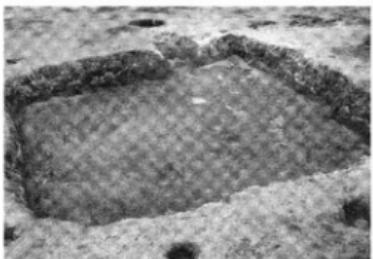
調査前の風景（1）



住居跡と遺物出土状況（5）



調査風景（2）



第1号住居跡（6）



調査風景（3）



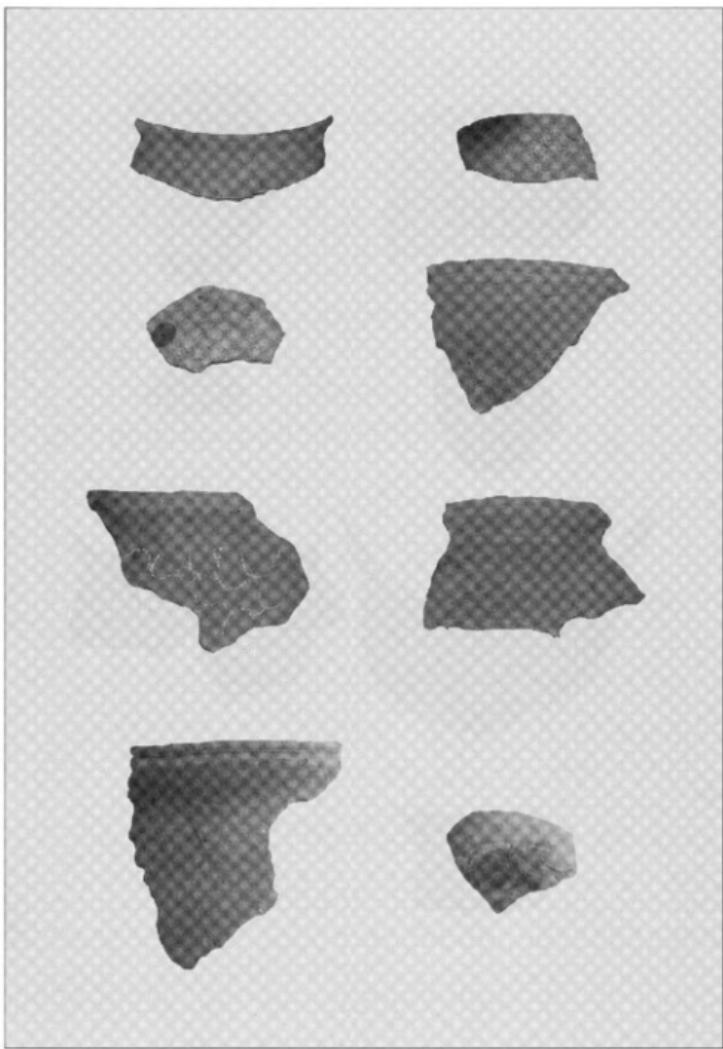
第2号住居跡（7）



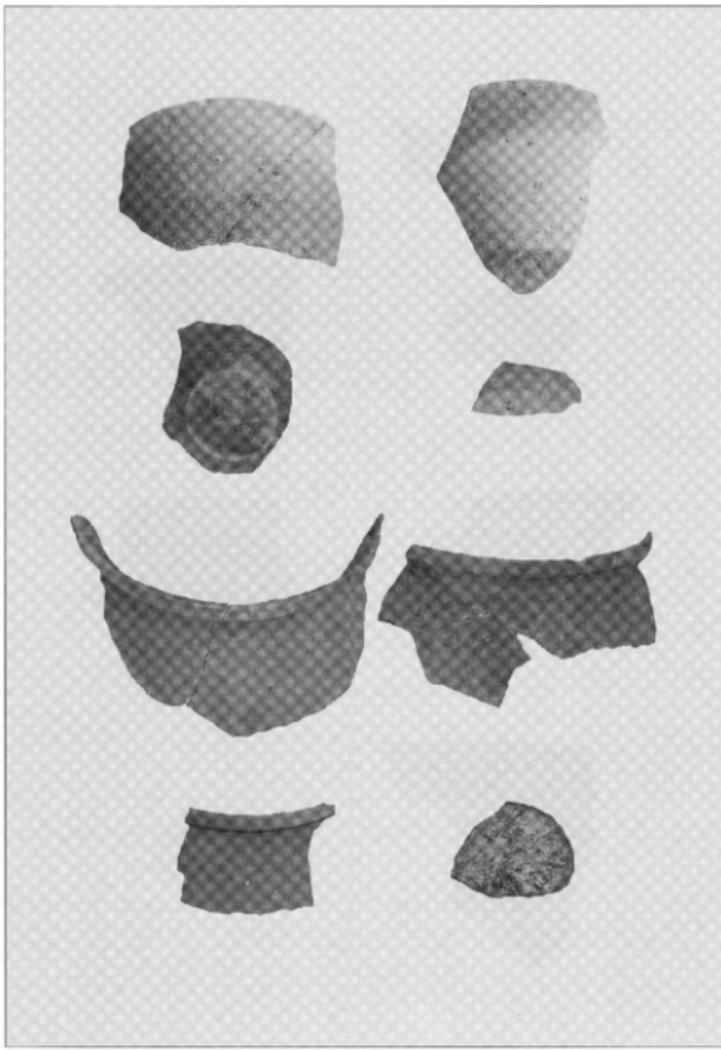
調査風景（4）



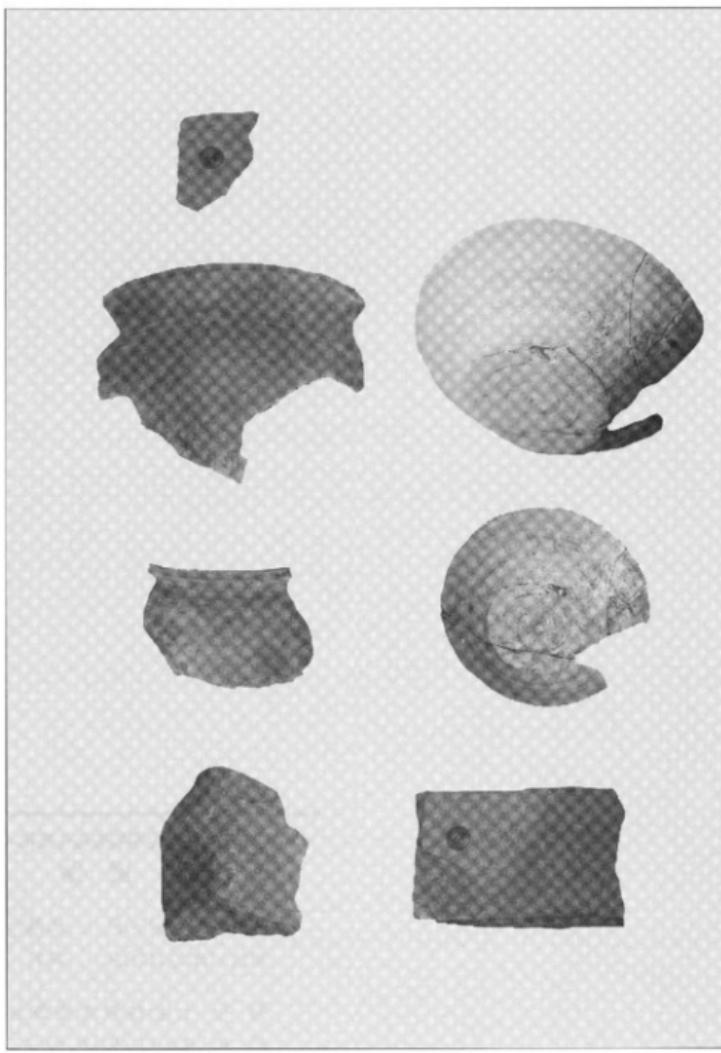
カマド跡（8）



第1号住居跡出土遺物（1）



第1号住居跡出土遺物（2）



第1号住居跡出土遺物（3）

七会村埋蔵文化財発掘調査報告書第4集
岡台遺跡

平成11年12月20日 印刷
平成11年12月20日 発行

発行 七会村教育委員会
印刷 (有)クリエイティブサンエイ
東茨城郡常北町河西1879-5
